編輯の後に

蒲生理事長が長らく御留守故に用事が山積して居るから本號の編輯は本會幹事依田彌亮氏にすつかり渡して了つた。尤も概略のプランだけは相談をうけたのだが！、大体此の雜誌の編輯と云ふことがいつも一心配の種子となるのだが今度だけは肩の凝りが下りた心地で六月の末一年の學生と一緒につれだつて見學の旅に上つて了つた。其の間依田氏は原稿を取り集めたり印刷所へ交渉したり價格を定めたりして萬事進行をして居てくれたが旅から歸つて見ると急に同氏は大日本蠶絲會へ轉轉することになつて居た。編輯は又逆戻りして肩を凝らさなければいけなくなつた。然し過去のえにしが薄いものと見えて此の嬰兒が産みの惱みを續けてゐる間に編輯は中島氏の手に渡り又も關西の旅に上り産聲も彼の地で聞くといふ始末である。

本號は卷頭にも陳べた通り第三號目であるから稍々体裁を整つたつもりである、實はもつと薄いものを出す計畫であつたが漸次原稿が殖ゑて來て百五六十頁に余る大册となつた。次號は可成的薄くして政府の緊縮方針に從はないと會計から叱かられる。兎に角もつと會員間の面白い消息を傳へたいのだが此の方面の種が一向集つて來ない。次號にはゴシップ欄を設けて奇想天外の風聞を載せたいから是非御投稿が願ひたい。

嬰するに如何に名優でも大向ふから「はりまや！」とかなんとか聲援か批評かをして貰はなければ藝道に「はり」がない、眞實藝の極致はアクターと觀客とがピタリとあつて全く無神のエクスタレーに醉つた時だ。演ずるものと觀るもの、造るものと讀むものいづれもピタリと來ないことには調子の出やう筈がない。吾等は必ずしも戯を打ち笛を吹いて人を踊らせやうとはしない。寧ろ人の笛吹き戯を打つのに合せて踊りたいのだ。

踊るものと囃すものとの眞の調和が醸其のものに生命を與へるのだ、編輯者は此の意味に於て、御鞭韃、御叱正御批評、御忠言等々を澤山頂戴致し併せて玉稿の御惠投を切望する次第である。

四方阿山の頂邊にあらわれた入道雲に眞紅な夕陽が映えて「炎暑」が中空に燃え上つたやうである。それでも吾が上田では午後六時の時計をきくと清涼に甦へり日中の暑さを一掃することが出來るのだが、南の土地の工場會社學校役所等に勤務せらるゝ同窓の苦闘を思へば同情に不堪、切に御自愛を祈り擱筆する。（七、一七、K生）